介護新聞2008年11月13日付

花凪屋繁盛記

連載2

人と人とがつながって

NPO法人在宅生活支援
サービスホーム花凪
木村美和子理事長

札幌に転居して…

「花凪屋」へつながる道がスタートしたのは、二〇〇〇年四月二日でした。それは、私が十勝から札幌に転居した日でした。

初めて住む札幌市西区という土地と、知らぬ人ばかりのご近所。ここに転居する前は、私の活動は人に対してする活動だから、もともとの「花凪構想」の舞台だった十勝を離れても、人がいればできる活動と、自分に言い聞かせていました。

ところが、一緒にしようと言ってくれた人、応援するよと言ってくれた人、サービスを利用するよと言ってくれた人。そんな気心が知れた人たちと離れてしまったことは、自分の都合での転居とはいえ、考えていた以上に寂しいものでした。

余談ですが、どこの施設でもあることと思いますが、「花凪下宿」でも下宿当初、「寂しい。家に帰りたい」と言う方がいます。私は万感の思いを込めて「寂しいですよね。知らない人ばっかりですから、寂しくて当たり前です」と言い、転居したころの話をします。

「本当に?」「本当の本当」で、大団円となったりするのですが、それでも収まらない下宿人と二人して、住宅街にある下宿の窓を全開にし、「さびしいよー!」と叫んだことがあります。大変迷惑な話なのですが、その後おかしさがこみ上げてきて、二人して大笑いをしてしまいました。この時、彼女と私の気持ちは通じ合ったと感じました。

単に「人がいるから寂しくない」ではなく、「気持の通じる人がいるから寂しくない」なのだと思います。

地域をリサーチ

「寂しい」から始まった札幌生活でしたが、その年の五月になって、一念発起しました。活動の拠点として自宅を使用することになり、改修工事も始まったので、もっと地域を知るためにリサーチをしようということになりました。調査員は私と夫です。西区社協や町内会長宅に伺い、お話を聞きました。

また、散歩リサーチなるものも行いました。自宅のすぐ側は犬の散歩道で、たくさんの住人が犬を連れて散歩していました。一人で歩いていると、見知らぬ人に話しかけるのはとても難しいですし、警戒もされますが、犬を連れて同士となると、会話も弾んだりします。わが家にもトイプードルの「ひな」なる犬がいましたので毎朝、毎夕お散歩三昧(ざんまい)でした。

その中で、わかってきたことはこの地域はもともと稲作地帯であったこと。一九六七年に札幌市と合併してから一挙に宅地化が進み、他地域から転居してきた方が多く、高齢化が進んでいるということでした。

散歩されている方の中には八十歳を超えた方もいて、連れている犬を指し、「この子を残していけないから、健康でいようと散歩しているの」と、おっしゃっていたことを覚えています。

「花凪」が所在する札幌市西区・平和地域の街並み

住む人もリサーチ

この地域で在宅生活支援の活動を展開するためのリサーチ活動は地道に進めていきましたが、もっと顔見知りをつくって、この地域の現状を知りたいと思いました。

ある日の夕方、勤務先から帰ってきた夫に、

「これから、この地域を知るためのリサーチに出かけます」

と、宣言。

「エッ! これから?」

「そうです。ターゲットは居酒屋Yです」

「単に飲みたいだけじゃないの?」

と、揶揄(やゆ)されながらも出かけました。

実は、自宅から徒歩で五分とかからないこの居酒屋は、転居した時から気になる存在でした。入り口に掲げられている「沖縄料理」「泡盛」という文字は、私を引きつけて止まないものでした。

念願叶(かな)い、意気揚々と暖簾(のれん)をくぐると、「いらっしゃいませ。こちらにどうぞ」という女将さんとご主人の声と極上の笑顔。「やっぱりここに来て良かった」と思いました。ご主人の沖縄料理にかける情熱的なお話を聞かせてもらった上に、この地域に住む「小魔女(こまじょ)」さんなる人形作家まで紹介していただきました。

この夜は、お酒も料理も、話もおいしくて幸せな夜になりました。そして、何よりもこの地域にこんな素敵な人たちが住んでいるんだな、ということを実感したのが一番の収穫でした。

任意団体「花凪」を立ち上げよう!

地域を知る中で、活動の母体をつくり上げようという思いが私の中で盛り上がってきました。

ところが、この地域在住二カ月の私にはまだまだ知り合いも少ない。考えた末に十勝で当初の「花凪構想」を語り合った友人、知人に声をかけました。声をかけた全員が、一緒に任意団体を立ち上げることに賛成してくれ、会員になってくれました。そんな仲間を含め二十一人で任意団体「花凪」は、二〇〇〇年七月八日に生まれました。

「住む地域は違っても、思いの点をつなげて線にしよう」が、最初の合言葉でした。